



294 号
2024/6

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



清境農場のお土産屋：台湾の退役軍人のために開設された「清境農場」ですが、今は観光地。羊の牧場や農園、花壇、薬草園などがあって、台湾では有名です。海拔 1,750 メートルに位置し、毎年 5 月～9 月の平均気温は 15 度から 23 度前後。写真は中腹のお土産屋です。
(台湾南投県 2024 年 4 月撮影 佐々木健之)

jī quǎn shēng tiān
鶏 犬 昇 天

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から

文と訳・有為楠君代ういくす

今月は、ちょっとメルヘンチックで面白いお話ですが、取り上げていたのは、私の持っている中では、この本だけでした。

・>・>・>・>・>・>

前漢の時代に、^{りゅうあん}劉安と言う著名な思想家がおりました。彼はまた、父親の地位を継承して淮南王となった政治家でもありました。

劉安は、多くの道教の本を読み、直ぐに仙人になる靈薬の精製法を考えはじめました。彼は何回か続けて^{はちこう}八公という仙人を訪ねて教えを乞い、仙人八公はとうとう彼に仙丹の作り方を教えました。

劉安は、八公が教えてくれた方法で、毎日心を静めて修養を積み、仙丹を上手く練り上げると、彼は矢も楯もたまらず出来上がった仙丹を飲み、残りを庭に撒いて、犬や鶏にも食べさせました。突然、彼は自分が飄々と風に乗ったような気持ちになり、下を見ると自分が既に雲の端に乗っているのを知りました。周りを見ると犬や鶏が、同じく雲に乗り、ワンワンと吠え、コッコッと鳴いていました。庭にいた犬や鶏も、撒かれた仙丹を拾い食いして、仙犬(?)仙鶏(?)になったのでした。

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味：一人の人が官位を得て偉くなれば、周りの人間も一緒に権勢を得る、という譬え。

使い方：彼のおじいさんが偉くなったら、彼の父親や兄弟まで良い仕事について、威張るようになった。まさに「鶏犬昇天」だな。

・>・>・>・>・>・>

このちょっと滑稽なお話は、後漢の時代、^{おうじゅう}王充が著した「論衡」という本に出て来ます。「論衡」は30巻85編からなる大著で、自然主義的立場か

ら自然主義論、天論、人間論、歴史論などを論じる「百科全書」的な書物だそうです。この本の記述姿勢は孔子・孟子に批判的ですが、2世紀に世に出てから唐代までは大著として評価を得ていました。しかし、宋代以降は、孔子・孟子批判の姿勢が祟って忘れ去られ、清代末から民国になってやっと詳しい訳が完成しました。1970年代の文化大革命のときには、批林批孔の姿勢に合致すると大いに評価されました。このお話は「論衡-同虚篇」のものでした。

意味は勿論、権力者が誕生すると、実力もないのに、親戚縁者が高い官位を得たり、部下や従者までいい仕事に着いたりするのを、皮肉っているのです。

それに加えて、修行を積み、仙人になり、更なる修行で、天に上ることもできるという考え方に、自然主義的な見地から、痛烈な批判をしています。

ところで、このお話の主人公劉安(BC175~BC122)は前漢の王族で、淮南王に奉じられました。劉安は孟子の「皇帝の悪政を正すのは同族王侯の義務」との説に同調し、度々皇帝の命に背いて反乱を企て、最後は自害し、一族は全て滅ぼされました。反面、彼は学問を好み、書や琴を嗜む文化人で、多くの食客を抱え、彼らと共に道家・儒家・法家・陰陽家などの諸説・思想を収集し編纂して、「鴻烈」という書物を世に出しましたが、現在は、その中の内書21編だけが「淮南子」として残っています。また豆腐の発明者とも言い伝えられています。劉安の食客の中に方士、いわゆる方術の使い手が含まれていたため、このような話が出来上がったのでしょう。

どう言う訳か、劉安は後世、いろいろな話の主人公としてよく名前が使われます。



挿絵：満柏画伯

江南の詩(1)

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

hàn dài yuè fǔ jiāng nán
漢代樂府『江南』

jiāng nán hàn yuè fǔ
江南 漢樂府

jiāng nán kě cǎi lián 江南可采蓮	lián yè hé tián tián 蓮葉何田田
yú xì lián yè jiān 魚戲蓮葉間	yú xì lián yè dōng 魚戲蓮葉東
yú xì lián yè nán 魚戲蓮葉南	yú xì lián yè xī 魚戲蓮葉西
yú xì lián yè běi 魚戲蓮葉北	

- * 江南＝長江南岸地域。湖南、湖北、江西、浙江、安徽南部、江蘇南部等を含む。
- * 可采蓮＝ハスの採取に適しているところ。又はその採取時期。何＝何と。賛美の意。
- * 田田＝水面を蔽う蓮の葉を形容する語。

〔訓読〕

こうなん
江南

かんだい が ふ
漢代樂府

こうなんはす と べ れんよう でんでん
江南蓮を采る可し 蓮葉何ぞ田田たる

うお れんよう かん たわむ
魚は蓮葉の間に戯る

うお れんよう ひがし たわむ うお れんよう
魚は蓮葉の東に戯れ 魚は蓮葉の西に戯る

うお れんよう たわむ うお れんよう
魚は蓮葉の南に戯れ 魚は蓮葉の北に戯る

この詩の解釈には諸説があります。一つは蓮の採取に励む若い女性たちの労働を賛美したもの。

今一つは若い男女の愛の交歓を暗示したものと
いう説です。何れも一理ありますが、それを逐一
紹介する前に、作品解釈の前提となる情景につい
て触れておきましょう。まず目につくのは「采蓮」
の二文字です。

采蓮とは「蓮を採取する」ことです。では蓮の何

を採取するのでしょうか。私たちが普通に想像する
のは「蓮根」ですが、蓮根ではこの詩のイメージ
に合いません。もう一つ思い当たるのは「蓮の実」
です。蓮は夏に花を咲かせ、数日後に、花のわきに
蜂の巣状の花托かたくを付け、その中に実を成らせます。
この実は食用に適していて栄養価も高く、薬用と
しても使われます。これを採取するのは専ら若い
女性たちの仕事でした。ここで隠し味のように浮
上するのは若い女性たちの艶やかな姿と歌声で
す。古来、蓮は「芙蓉」とも呼ばれ、美人を形容す
る言葉として使われていました。今でも中国では
「芙蓉」はしばしば美人の代名詞として使われま
す。若い女性の労働を賛美する歌の文句としては
極めて相応しいものであったといえるでしょう。

そこに寄り集まるのは若い男たちです。周りで
群れ遊ぶ魚たちの生き活きとした様子がそのこと
を暗示的に物語っています。

古くから長江沿岸には、予め定められた日に男
女が群れを成し、夜を徹して歌い踊って自由に伴
侶を求め合う風習がありました。この類の男女交
歓の儀式は儒教文化が普及する以前、江南地域全
般に及んでいたと考えられます。万葉時代に流行
した日本の歌垣のようなものです。今回取り上げ
た『江南』は、或いはそのルーツかもしれません。

〔和訳〕

江南は蓮摘む時節 蓮の葉は水面を蔽い

蓮の葉陰を魚戯れる

蓮の東を魚戯れて 蓮の南を魚戯れる

蓮の西でも魚戯れて 蓮の北でも魚戯れる

白居易の《閑行》
かんこう

報告:花岡風子

白居易と言えば、平安時代から日本人に親しまれてきたことが、最近の NHK 大河ドラマ「光る君へ」で紫式部が主人公になったことで、再度スポットが当たってきた感があります。

白居易は中唐の詩人で、字は楽天ですので、白楽天とも言われていますね。晩年は仏門に入ったので、号は香山居士と言います。それほど裕福な家に生まれたわけではなかったのですが、二十代で科挙に合格している天才でした。官僚になり、翰林学士、左拾遺を歴任しています。

「左拾遺という役職は、科挙に合格したての人がなる下っ端の役職なんですけどね、皇帝の過ちを指摘するという仕事なんですよ。下っ端といえば科挙に受からなかった杜甫もかつてこの役職に就いてましたね。しかしね、バカ正直にこの仕事をやるとあんまり良いことないですね」と植田先生。

白居易も杜甫と同じく、正直に自分の意見を言うことで左遷の憂き目にあっています。さて、白居易という人の性格は、正義感は強いけれど、自分をよく見せようと突っ張らない自然体、また民思う気持ちが強い人間でした。「我々が生活していけるのは、民衆が働いてくれているからこそ」と常々思っていたのです。「だから、彼は民衆に対して恥ずかしい、という考えを持っていたんですね。

日本人の感覚とも合いますね。文学者の有島武郎の考えにも通じるところがあるし、戦後唯一の社会党から出た総理大臣片山哲氏は非常に白居易が好きでね、『長恨歌』『琵琶行』の解説本まで書いています」と植田先生。

白居易の作品は、作風によって三つのジャンルに分類されます。一つは、〈風論詩〉という社会体制への批判、『売炭翁』などの作品があります。〈感

傷詩〉という悲しみの歌、これには『長恨歌』や『琵琶行』があたるでしょう、そして〈閑適詩〉とは日常生活の中でわき起こる感覚や趣きを詠じたものであり、今日のお題である『閑行』もその一つです。では、詳しくみていきましょう。

wǔ shí nián lái sī lǜ shú
五 十 年 来 思 慮 熟
máng rén yīng wèi shèng xián rén
忙 人 应 未 胜 闲 人
lín yuán áo yì zhēn chéng guì
林 园 敖 逸 真 成 贵
yī shí dān shū bù shì pín
衣 食 单 疏 不 是 贫
zhuān zhǎng tú shū wú guò dì
专 掌 图 书 无 过 地
biàn xún shān shuǐ zì yóu shēn
遍 寻 山 水 自 由 身
tǎng nián qī shí yóu qiáng jiàn
倘 年 七 十 犹 强 健
shàng dé xián xíng shí wǔ chūn
尚 得 闲 行 十 五 春

五十年來思慮熟し

忙人應に未だ閑人に勝たざるべし

林園に傲逸するを真に貴しと為す

衣食单疎なるも是れ貧ならず

専ら図書を掌どりて、地を過つ無く

遍く山水を尋ねて自ら身を由らしむ

倘し、七十にして猶お強健なれば、

尚お閑行して十五春を得ん。

まず、表題の閑行とは、ゆっくりのんびりと散歩するという意味です。

五十年も生きていれば、思慮も熟すものだ。

多忙な人が、暇な人に勝ることなどはない。

自然に好き放題に生きることこそが、貴い。

衣食が粗末であることは、決して貧しいことで

はない。

専ら公務については地位を台無しにするような過ちはしない。

遍く山水を好き勝手に訪ね歩く自由の身だ。

もし七十まで元気であるならば、気ままに、あと十五回も春を迎えることができる。

この詩は、白居易が五十五歳の時に書いたものらしいです。「こういう考え方は日本人も好きですよ。あくせくと働くのは働くけど、最後はゆっくりしたい。欲はかかないでね。でもねえ、年金の心配があるからね」との植田先生の言葉に一堂から失笑が漏れました。

白居易も、晩年は自ら都を離れて南方の地に向を申し出たり、最後は洛陽の広大な庭のある家で、池に舟を浮かべ、鶴を飼う生活を送ったようです。74歳の生涯という、当時では大変な長寿ですね。白居易の生きた時代も政治の世界はドロドロで大変でしたが、心の平穏を保って晩年を豊かな心境で生きられたのは素晴らしいですね。

白居易は日ごろから陶淵明を敬愛していました。「衣食单疏不是贫」この考えは元を辿れば陶淵明の詩の境地でもあります。陶淵明とちょっとちがうのは、以下の対句です。

「专掌图书无过地、遍寻山水自由身」

つまり、公と私を分けて考え、どちらも大切だと言っています。「職をなげうって隠遁した陶淵明と違い、白居易は公務と私的生活を両立させようとしています。この対句には白居易の特徴がよく現れていますね」と植田先生。自然体でバランスの取れた人柄が浮かび上がってきます。

もう一つ、そんな白居易の自然を描写した詩を

鑑賞しました。

すで いぶか
已に訝る衾枕の冷ややかなるを
復た窓戸の明らかなるを見る
夜深くして雪の重きを知る
時に聞く折竹の声

yǐ yà qīn zhěn lěng
已 訝 衾 枕 冷
fù jiàn chuāng hu míng
复 见 窗 户 明
yè shēn zhī xuě zhòng
夜 深 知 雪 重
shí wén zhé zhú shēng
时 闻 折 竹 声

意味は

おや、おかしいな、布団が冷たいぞ。
ふと窓を見ると明るい
夜が更けて、これは大変な雪だなあ
雪で竹が折れる音が聞こえてくる

作者は家の中にいて、床についたまま雪を見ないで想像しています。孟浩然の『春暁』に似ていますね。

これも《閑適詩》に入るのでしょうか。さて、「閑」という字についてなのですが、以前は正直この字が好きではありませんでした。ある時、古典に詳しい中国人の先生から、「閑の字の門は窓のことをさして、自宅の窓を開けると、そこに一本の木があり、それを見ながら瞑想する、というのがこの字の本来の意味」と聞いてから、私の中で閑の字はイメージが一転し、心の余裕に溢れた素敵な言葉だという認識に変わりました。

白居易は、その人柄も作品も古来、日本人に愛されてきたことが実感できましたが、最後に植田先生のお言葉が耳に残りました。「こういう文化人、知識人は日本人の憧れでもありましたが、いなくなりましたね。残念ながら…」。

「小浪底」の国際的ブランド化

文と写真=村上直樹

2020年10月号の「雑感」で河南省の代表的な総合大学の1つである「河南大学」をやや詳しく紹介した。今から100年ほど前の1912年2月12日、ラストエンペラー溥儀が退位して260年以上続いた清朝が幕を下ろすとともに、2千年以上に亘る中国の封建君主制時代も終わりを告げた。新しい時代の到来が期待される中で、同年9月に河南大学の前身である「河南留学欧美（欧米）予備学校」が設立された。場所はもともと雍正九年（1731年）建造の「科挙」試験会場「河南貢院」があった現在の河南大学明倫キャンパスに当たる。

2006年5月にはこのキャンパス全体が「河南留学欧美（欧米）予備学校旧跡」として「全国重点文物保护单位」に指定されている。キャンパス内にある数々の歴史的建造物の中でも特筆すべきは何と言っても、南大門を北にまっすぐ進んだ先で正に威容を誇る中国式建物、大礼堂（大講堂）である。いや、誠に残念ながら、あった。

西洋の先進技術も取り入れ1934年に落成した大礼堂は、この大型連休さ中の5月2日深夜に発生した火災により、ほぼ焼失してしまった。私も当日朝のネットニュースで映し出された燃え盛る光景に、我が目を疑った。大規模修繕中の出来事であった。死傷者はいなかったが、河南大学はその歴史が刻まれたシンボルを失ったことになる。大学当局が5月3日に発した公式通知の中には「我們無比痛心，自責，向全体師生，校友以及關心学校的社会各界表示深深歉

意。」（我々は他に比べようもない、痛心と自責の念にかられており、全ての教師、学生、校友および大学に関心のある社会各界に対して深く深くお詫び申し上げる）とある。

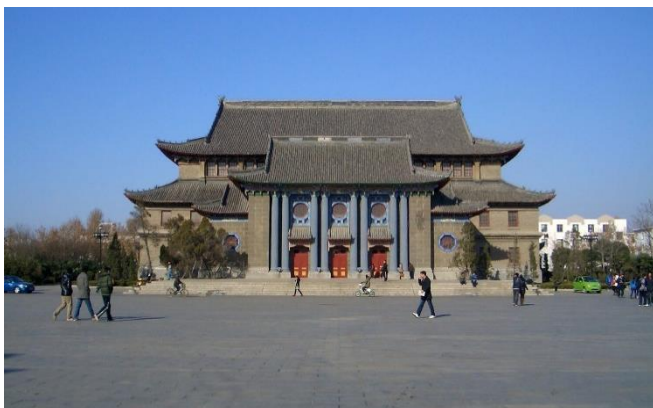
5月半ば時点でネット上でも原因究明、責任追及、今後の対策等の議論が盛んである。たとえば2年前の2022年6月に河南大学の設計学専攻の大学院生・翟羽佳さんが提出した修士論文『教育建築遺産的消防与可持續保護利用研究——以河南大学近代建築群為例』が注目を集めている。この論文では大礼堂の防火面での問題点を詳細に検討し、警鐘を鳴らしている（『給水排水』2024年5月7日）。当局がその指摘を真剣に受け止めて対策を講じていたら、今回の惨事は避けられたかもしれない。

さて、ここからは標題に即した話題に移りたい。前回お話したように昨年末の河南旅行では黄河に造られた小浪底ダム（小浪底大壩）がある洛陽市孟津区小浪底鎮の小浪底村に行く機会があった。今回はまずこのダムについて少し調べてみた。

小浪底ダム建設プロジェクト（小浪底水利紐樞工程）は1991年4月の第七屆（期）全国人民代表大會第四次會議で承認された第八次五か年計画（“八五”）において主要な水利事業として明記され、同年9月に前段階の工程が、1994年9月に本格的な建設が始まった。基本的に完成したのは2001年末である。

「河南省水利学会」によるとその効用は4点である（2017年7月20日公表）。まず、黄河における水害対策の標準を大幅に向上させたことである。従来は百年に一度レベルの水害を防ぐことしかできなかったが、このダムの完成後は、他のダムとの共同で運用することにより、千年に一度の規模の水害を防止することができるようになったそうである。

次に黄河下流の底に泥が堆積するのを効果的に遅らせることができる。これは、このダムによって黄河上流からの土砂がせき止められ、下流に向けての水流速度が増すからである。また、3番に利用可能な水量が増加した。このダムが運用されて以来、基本的に



焼失前の大礼堂（2012年12月撮影）

黄河下流で水流が途絶えることはなくなり、青島、天津、白洋淀（河北省中部の沼沢）といった下流地域へ水の供給条件と生態環境を改善した。

さらに、4番目としてあげられているのはこのダムが新たな観光事業を興した点である。このダムは晋豫（山西省と河南省）黄河峡谷の中に「高峡出平湖」（高い峡谷に平な湖を生み出す）を実現させた。その結果として自然の景観を利用した河南省の新しい観光名所を創り出した。現在、面積約10平方キロメートルの大壩湿地公園を中心としたダム周辺一帯は「国家AAAA級旅遊景区」に指定されている。なお、「高峡出平湖」とは1956年に毛沢東が武漢長江大橋を視察した際に詠んだ「水調歌頭・遊泳」（水調歌頭という曲調の詞）の中の一節で、直接は長江三峡ダム建設の構想を意味している。

一方、大規模なダムであるため、その建設に伴って埋没する面積も大きく、もとの住民は別の場所への移転を余儀なくされた。中央官庁の「水利部小浪底水利紐樞管理中心」の公式ホームページによると小浪底ダムの建設に係る住民移転対策の概要は以下のようなものである。移転を必要とした人口は、工事現場・ダム本体・橋など付随施設を含めて河南省で15.94万人、山西省の4.2万人の計20.14万人である。移転先は両省の16の県（県級市、区）に及ぶ。

工事現場に伴う移転の対象は河南省の孟津県（当時）と済源市の7つの郷と19か村の23.34平方キロメートル、1.17万人である。この移転は1992年8月に始まり、1994年4月に完了している。一方、水位275メートルのダム本体によって水没等、影響を受ける面積は277.8平方キロメートルであり、住民は済源、孟津、新安をはじめとする河南省と山西省の18.97万人である。その住民移転は3期に分かれて実施された。第1期は河南省内の1つの郷と27か村の4.61万人で、1994年に開始され1997年に完了している。第2期は最も大がかりで、10の郷鎮と104か村の12.65万人が移転の対象となった。そのうち8.91万人が河南省、3.74万人が山西省である。1998年に始まり2001年に完了している。第3期は1つの郷鎮と43か村の1.7万人が対象であり、そのうち1.22万人が河南省、0.48万人が山西省であった。2001年に始まり2003年に完了している。



小浪底村中心部に向かう道路（2023年12月撮影）



「小浪底村中心部の毛沢東像（2023年12月撮影）」

私が昨年末に訪れた小浪底村はそうした移転対象のうち村全体で移転してできた新しい村である。面積は1,051ムー（0.7平方キロメートル）、329戸、1109人が住む（2017年5月時点）。写真は役所（村民委員会）、小学校など公共施設が集まる中心部へ向かう舗装された道路である。中心部には毛沢東の像が立っている。また、写真では確認することが難しいが、そのすぐ近くには新しく立派な会議場も建てられている。

注目したいのは、近年、「小浪底」の名を冠したこの村、あるいは同村を含む小浪底鎮において「小浪底」をブランド化して国内外に広め、地域の活性化につなげようとする動きが見られることである。コロナ禍さ中の2022年2月26日に鄭州大学の孫学敏教授が、小浪底鎮および各村の共産党と自治体幹部の前で行った講演の中で「把小浪底鎮打造成世界産業名鎮和把『小浪底』品牌打造成世界品牌」（小浪底鎮を国際的な産業の有名鎮にし、「小浪底」ブランドを世界的ブランドにする）という構想を語ったことが具体的契機である（『小浪底品牌管理』2022年7月12日）。（つづく）

「秦皇島」から「承德」へ

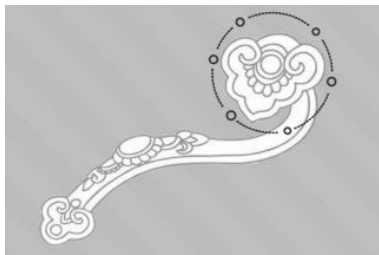
「避暑山莊・外八廟」駆け足旅行(13)

文と写真 吉光 清

「如意」という言葉からの連想は孫悟空の「如意棒」、天翔ける龍が持つ「如意宝珠(ドラゴンボール)」、「如意輪観音」というところである。「如意」の意味は「意のまま、思い通りになる」ということであるから、「如意棒は長さを自在に変えられる棒」、「如意宝珠は手に入ると願いが全て叶う宝珠」と理解できる。また、「(六臂の)如意輪観音」は、「右第2手で『如意宝珠』、左第3手の指先で(仏教を守る)『法輪』を持つ、六菩薩の最上位の観音菩薩」である(ウィキペディア)。

一方で、「如意」は仏教美術の展覧会や博物館の中で見て来た歴史的価値の高い伝統工芸品である。

「百度百科」によれば「『如意』は、手が届かない痒い所を搔けるように考案された道具で、『こうしたい、と思うことを意のままに出来る』という意味で、この名称が付けられた。時が経ち、その形状や用途が変化し、貴族や上流社会における贅沢品となり、権力や地位の象徴となった。文化的には、『日々の自分を



「如意」の基本的な形状
(「秒懂百科」の画像から)

顧みて行動すれば、祝い事が続き、経済的に豊かになり、長寿が得られるなど、願いが思いのままに叶うだろう」という警句を指し示すものとなった」。

また、「如意(孫の手)は古代中国では全国的に使われ、『搔杖』という別称もあった。—中略—、僧侶や道士が、読経や説法を行う時に、経文を記した如意を手を持ち、忘れた時の備えとした」、「中国の伝統工芸の宝物であり、外形は灵芝(ヒジリダケ)に似るが、玉や黄金の材料で製作され、姿形は正に如意(孫の手)である」との説明もある。

■「金莲花」を見たかったが！

「如意洲」に渡ってから、道も分からないまま、時計回りに半周ほど歩き(途中に「烟雨楼」と「清晖亭」があった)、内陸に向かったところが「法林寺」に行



「百度地図」上に重ねた「如意洲」内を歩いたルート

き着いた(上の地図を参照)。

「法林寺」を出たところで、時刻は午後3時半近くになっていて、木々の葉から漏れる陽射しは弱くなり始めていた。「金連映日」に立ち寄る余裕は無かったが、「金連」を「金蓮」と誤解して、「花」をひと目見たいと思い、西に向かう道を先へ進んだ。しかし、途中で断念して、砂州へ向かって方向転換した。

(帰国後に、あちこち撮影した写真全体を点検したら、「如意洲」に渡ってすぐに撮影した1枚に黄色い花の群落の写真が写っていた。撮影した時は、尾瀬や高原地帯でお馴染みの「キスゲ」だと単純に思っていた。もしか、これが「金莲花」だったのだろうかと思い、「百度百科」で「金莲花」を調べた。「冷涼、湿潤な環境を好み、内モンゴ、河北省、山西省などに自生し、海拔一千八百米以上の高原や疎林地帯でも生育できる耐寒性がある。様々な薬効があり、冬は寒冷で夏は涼爽な、傾斜の緩やかな山地で栽培される」とあった。

「キンポウゲ科」の植物であり、「避暑山莊」内で自生していて当然の植物であった。なお、日本で言う「金蓮花」は中南米原産の「ナススタチューム」のことである(ウィキペディア)。字面はとても紛らわしい。

「キンポウゲ科」の植物は、「トリカブト」



写真に残っていた黄色い花

や「ニンソウ」の如く、葉には深い切れ込みがあり、横に広がるのに対して、写真では葉が細長く「イネ」のように直立している。やはり、写真は「キスゲ」で、「金蓮花」ではなかったと納得した。

最近、「百度地図」を見たら、「如意洲」に渡った場所の近くに「大花萱草園」というのが見つかった。写真に写っていたのはその一部に違いない。

■砂州を渡って帰路につく

手持ちの大ざっぱな地図からでも、砂州の長さの方が、島を半周した距離より長いことが見て取れた。砂州の道は二人並んで歩ける広さ以上に整備され、両側に腰の高さの欄干が付けられている。片側ずつ、交互に柳の木が植えられている。長い砂州や湖岸の景色も独特で風情があったが、足を止めることも無く先を急いだ。途中、数回、他の観光客たちを追い越したり、すれ違ったりした。

15分ほどで砂州と繋がる湖岸に到達した。砂州を抜けるところに簡素な門があり、潜り抜けてから見ると、青地に金色文字で「洲意如」と書かれた看板が掛かっていた。「麗正門」を通過してから、素直に進んで来ると、この門を潜り、砂州を歩いて、「如意洲」に渡って行くのが順路という訳なのだろうか。

簡素な造りの門の前を通った。傍らの柳の枝が門に少し被さっている。門の高い場所には「翠滌風閣」の文字が掲げられている。これは左から読むべきか、それとも右から読むべきだろうかなどと考えた。

ここまでに観た景点の説明や、地図に記載されている景点の名称を見ると、「漢字四字」の場合は「景点の素晴らしさ」を表現する言葉で、「漢字三字」の場合は建物や事物の名称をそのまま景点の呼称にしていることが多いようだ理解した。

そこから5分ほど歩いた場所に、大人の背丈を超



康熙/乾隆三十六景の内訳が彫られた石碑

える高さの石碑が建っていた。白い大理石製(?)のようで、大きな平面を作るために、縦長の石板を3枚合わせたらしい継ぎ目が見えている。

■「三十六景」の内訳と山荘内の地形図

左右の上部の角が面取りされた横長の六角形である。縁の全体が花模様の図案で飾られている。右半分の上部に太く大きな文字で「避暑山莊平面図」と彫られ墨が入れられている。左下隅の近くには正方形の印章が彫られ、「避暑山莊」と読むことが出来る。

「康熙三十六景」の内訳が上から下に18景、その右横にも18景が上から下に、2段に亘って彫られている。全て左から読む漢字四文字である。読めない文字が多い中で、「青楓緑嶋」が右段の上から3番目にあつたが、「翠滌風閣」は見つからなかった。

「乾隆三十六景」は「康熙三十六景」の右側に漢字3文字で、やはり、18景ずつ、2段に亘って記されている。しかし、こちらは地肌が黒っぽくなっていて、文字は墨が取れて、読み難くなっている。どうして、こうなったのかと訝しく思ったが、度々、拓本を取られたせいではないかと考えた。

「乾隆三十六景」の最初は「麗正門」で4番目に「如意湖」（「如意洲」ではなく）がある。15番目に「清暉亭」があり、その下に「般若相」「倉浪嶋」「一片云(18番目)」と続いている。いずれも「如意洲」内にあるので、近接する景点を順番に並べているのだと考えられる。ただし、「烟雨楼」は見つからず、手持ちの地図における景点表示は、必ずしも「三十六景」に一致させられていないことが判明した。

康熙帝・乾隆帝、合計して七十二景もあるとは恐れ入った。知ったうえで、「避暑山莊」を巡ったなら、オリエンテーリングのような面白さも生まれるだろうが、半日ほどの駆け足散歩では望むべくもない。

石碑の地図と手持ちの地図とを比べると、石碑の方は建物の位置を忠実に示しているが、文字が小さくなり彫るのが難しかったらしく、景点や建物の名称は殆ど彫られていない。城壁や主要な通路、地形の特徴は良く表現され、「麗正門」「如意湖」「澄湖」など重要な事物の名称だけは大きめの文字で彫られている。筆者が「如意洲」へ渡ってきた道は、かつては存在しなかったのか、描かれておらず、「如意洲」は一段と『如意』の形に見えている。（つづく）

●資料：「承德市城区导览图」、中国地图出版社

青 蛙 花

訳：一瀬靖子／大槻一枝

楊さんは貧しい狩人でした。通り名は“鉄砲撃ちの楊”でした。彼には三人の娘がいました。三人とも花が大好きでした。春、夏、秋には、彼女ら三姉妹は丘を駆けまわって沢山の花を摘んで帰り、いたるところに飾りました。

冬になると、野山には花が無くなってしまいます。でも三姉妹は、楊さんが猟銃を担いで山に行こうとすると、「父さん、お花が咲いていたら採って来てね」と頼むのでした。

「外は雪で真っ白なのに、どこに花が咲いているんだ」と、彼はひげを撫でながら、そうつぶやくと出かけて行きました。彼は一日中、山で狩りをしましたが、花は一つも見当たりませんでした。ところが、彼が狩りの獲物を携えて家路を急いでいると、谷川のそばで綺麗な花を見つけました。

手を伸ばして摘もうとすると、花は突然一匹の青蛙に変身し、まん丸い目でこちらを見えています。彼は化け物だと思って身をひるがえすと逃げ出しました。青蛙はぴょんぴょんと、楊の後を追いかけてながら呼びかけます「鉄砲撃ちの楊さん、私は青蛙の花です。人を傷つけたりしませんから怖がらないでください」。

楊さんはこれを聞いて立ち止まり、訊きました「どうして、あなたは花に変身していたのですか？」。

青蛙は答えました「あなたの三人の娘さんが花を欲しがっているではありませんか？」。

楊さんが言いました「でも、今はまた蛙に変わってしまったでしょう？」。

青蛙が傍らの草にフツと息をかけると、その草に美しい花が咲きました。彼が喜んで花を摘もうとすると青蛙が遮って言いました「貴方はどの娘さんに、この花を上げるのですか？ その娘さんを私のお嫁にください。嫁いでくれないなら、この花は上げられません」。

彼はしばらく考えていましたが、この青蛙は、きっと仙人だろうと思い、彼の求めを受け入れて花を摘

みました。

青蛙はぴょんぴょんと、楊さんの後について彼の家に入りました。三人の娘は父親が持ち帰った花を見ると、大喜びで互いに奪い合いました。

「この花を貰った者は、彼のところに嫁入りしなきゃならぬのだぞ」と、楊は後ろについてきた青蛙を指しながら、娘たちに話しました。

長女は、父親の後についてきた、全身ボツボツで、緑一色、目を大きく見開いた青蛙を見ると、「誰が、こんな化け物の妻になるものですか！」と、怒って、青蛙に唾を吐き、花を捨てて行ってしまいました。

次女は、その花を拾い上げ、「花は綺麗だけど・・・青蛙のお嫁になるのは嫌だ」と花を三女に渡して去って行きました。

三女はこの花は良い香りがするし、本当に美しいので手放すには忍びないと感じて、父親に「私、私が行きます」と言いました。父親もこれに同意したので、その日、青蛙は三女を伴って帰って行きました。

青蛙の家に着いたところ、不思議や不思議、青蛙は忽ち美少年になり、彼の棲み家は皇帝の宮殿のように美しくなって、三女と彼は幸せな楽しい日々を過ごしました。そうして、七日後に、三女は青蛙と共に里帰りしました。

長女は三女の綾錦をまとった姿を見ると、自分の貧しい服装を情けなく感じ、三女にいろいろ問いかけました。三女はありのままを話しました。

長女は嫉妬心から「三女を殺して、自分が青蛙の妻になって、幸せな日々を送りたい」と思いました。彼女は井戸端に三女を呼び、一緒に洗濯しようと誘いました。三女は服が汚れると気遣って、まず、これを脱ぎ、かつて自分が家で着ていた服に着替え、長女について井戸端に行きました。長女は三女が気づかぬうちに意を決し、三女を井戸に突き落とし溺死させました。そして、いかにも悲しげに涙を流し、父親と次女に「三女は不注意にも、井戸に落ちて死んでしまった」と告げました。

「これは何としたことか！ 青蛙は神なのだ。彼が事実を知ったら必ず罰が下るぞ！」。

楊さんと次女はどうしたらよいものかと、うろろうするばかりです。長女は悲しい振りをしながら「そうだわ！ 青蛙は末の妹がお気に入りだったでしょう。私は顔がよく似ているから、私が彼女の服を着て青蛙について行けば、一家の災難は逃れられるわ」と言いました。彼らは長女の考えに同意し、長女はその日、青蛙について帰って行きました。

長女に殺された三女は、長女への憎しみと悔しさが忘れられず、言葉の話せる小鳥に変身し、毎日、青蛙の家の周りを飛んでは、「奥様が変わったのに、まだ分からないの！」と、繰り返し訴え続けました。青蛙は初め、何のことか分かりませんでした。でも、この小鳥は昼も夜も叫び続けます。青蛙は、おかしいと思って妻（長女）に訊きました。妻は驚いて「知りません」と、ただ頭を振るばかりです。青蛙は、義父の“鉄砲撃ちの場”を招きました。

楊さんは鳥の声を聞き分けることができ、三女が長女に殺害されたことを知りました。けれども、本当のことを告げれば、今度は長女が婿の青蛙に殺されてしまうのではないかと恐れ、思い余って、鉄砲を小鳥に向け、一発で撃ち落としてしまいました。

その小鳥の血が、家の傍らにポトリと落ちました。しばらくすると、その一滴の血から花山椒の木が生えて来ました。そして木いっぱい、真っ赤な花山椒の実をならせたのです。

青蛙は木に登って花山椒を採りました。山椒の棘は、彼を刺しませんでした。ところが妻（長女）が登って山椒を摘みますと、あちこち棘に刺されて血だらけになり、服もめっちゃめっちゃにされてしまいました。彼女は怒って、斧で花山椒の木を伐ってしまいました。

青蛙は花山椒の幹を削って一揃いの化粧道具を作りました。不思議や不思議、この一揃いの化粧道具は、食卓を宴席に変えてしまうことが出来たのです。青蛙が外から帰ると、卓上いっぱいの、色とりどりの料理や美酒の用意ができています。青蛙にとっては、どれも美味しく、香りの良いご馳走でした。しかし、妻（長女）が食べると蕎麦殻の粉よりも、裸麦の皮より不味いのです。苦く、渋く、とても呑み込むどころ



「藍色鼠尾草(シソ科鼠尾草属)」の群落(「百度百科」より)

ではありません。青蛙は不思議に思いました。

ある日、妻が外出した折に、青蛙は門の後ろに隠れ、化粧道具の動きを見ていました。化粧道具は化粧台から滑り落ち、綺麗な少女に変身しました。青蛙は何処かで見たような少女だと思いましたが、はっきりと思い出せず、彼女が何をするのか見ていました。美少女が化粧台に向かい化粧をすると、香りのよい料理ができました。また、髪を掻きあげると、今度は美酒が出て来ました。青蛙は喜んで傍らに寄り彼女を抱きしめて、「何処から来たのか？」と再三、尋ねました。

彼女は涙を流すばかりで何も話しません。青蛙は、いらだって「話さないなら、話すまで離さないぞ！」と言いました。彼女は仕方なく本当のことを告げました。そして、「お願い、殺さないで。私たちは仲良くしましょう」と懇願しました。

青蛙がフッと息をかけると、宮殿のようだった家は瞬く間に消え、周りには荒れた山や古い森ばかりが残りました。彼女（三女）は青蛙と共に一對の鳥になって飛んで行きました。

長女が外出先から帰って来ましたが、自分の住んでいた家は見つからず、森や林をさ迷い歩いた末に、帰り着いたのは里の家でした。

(羌族に伝わる民話) 整理：戴 北辰

訳者注：「青蛙花」は「青蛙草」の花と考えられます。「青蛙草」は「荔枝草」「癩疱宝草」などと並ぶ「蛤蟆草」の別称です。ポツポツした葉の表面から来ていると考えられます。「蛤蟆草」は「鼠尾草属（アキギリ属）」の1年生又は2年生の食用・薬用植物です。冬季でも青いことから「雪見草」「过冬青」などと呼ぶ地域もあります。「鼠尾草属」は美しい花を咲かせる種類も数多くあります（「百度百科」を参考）。

女子教育のパイオニア・津田梅子(完)

和田 宏

〈伊藤博文邸に住み込み〉

帰国後、岩倉使節団の副使でもあった伊藤博文の家に住み込み、家庭教師兼通訳をし、20歳で華族女学校の先生になった。梅子がアメリカに行ったのは、『官費留学生』という立場で、国費で留学した訳で、1年間の留学費が1000円と言われていた。当時、小学校の教員の初任給が1年間60円と言われるので、如何に大金だったかが判る。これに対して梅子は強い自覚があり、日本の為、お国の為になんか恩返しをしなければいけないと、強く責任を感じていた。一緒にアメリカに行った永井繁子と山川捨松が相次いで結婚したが、男尊女卑・家父長制と言う男女差の厳しい状況は依然として続いていた。梅子は、帰国した時、日本の女性の置かれた地位の低さや無学さに落胆した。

〈再び渡米〉

梅子は、帰国から7年後の1889年7月、華族女学校の教師のまま、24歳で再びアメリカのペンシルベニア州のキリスト教フレンド派(クエイカー)のプリンマー大学に1892年8月までの3年間留学し、父・仙の影響もあって生物学などを学んだ。



プリンマー大学入学当時(24歳) — 津田塾 hpより

プリンマー大学を選んだのは、父・仙がクエイカー教徒になっていたからで、ここで、梅子は、4歳年上のアンナ・コープ・ハツホーン(1860・1月～1957・10月 享年97歳)と出会い、終生の友となった。アンナは、梅子の父・仙がアメリカ

から持ち帰った医学書の著者ヘンリー・ハツホーンの娘だったのだ。

〈「万国婦人連合大会」に参加〉

梅子は、1898年6月アメリカのデンバーで開かれた「万国婦人連合大会」に日本の婦人代表とし

て参加。アメリカでは当時婦人の問題を研究するクラブが2700ぐらい、会員も16万人ぐらいいた。それらの代表が集まった会議で、3000人の聴衆の前に梅子は演説をした。“日本の女性の教育はまだ未だである。しかし、いずれは転機が訪れるだろう。日本の女性が、東洋諸国の女性の良い助け手となる日が来るだろう。また女子教育が広まり、女性の地位が高まるに連れて、全世界を通じて女性が奴隷的な服従とかあるいは人形の様な状態から脱却して、真に対等の資格で男性の良き協力者になる時代が来るだろう”という内容だった。

梅子は、同年8月ニューヨークで三重苦のヘレン・ケラー(当時18歳)と会い、手紙を貰って勇気づけられた。翌1899年にはイギリスに赴き、近代看護教育の生みの親・フローレンス・ナイチンゲール(当時78歳)と面会して励まされ、プレゼントされた花束を押し花にして日本に持ち帰った。

〈女子英学塾〉

梅子は、華族女学校(現・学習院女子中等科・高等科)と女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学)の先生を辞めて、1900年9月14日、35歳の時、念願だった塾を麴町区一番町(現：千代田区三番町)に開いた。「女子英学塾」という名の教師5人と生徒10人の小さな学校だった。後の「津田塾大学」である。生徒たちは英語で授業を受け、塾に住み込み、土曜日は夕食を作り、フォークダンスで締めくくり、オルガンに合わせて歌い踊った。1903年4月に第1回卒業生8人を送り出し、うち5人が英語教員の資格を与えられた。

ここで、梅子と新渡戸稲造(1862年9月～1933年10月 享年71)との関係に触れると、新渡戸は清貧を尊び、平等主義を旨とするクエイカー教徒であり、梅子もクエイカー教徒だったと思われる。女子英学塾が出来て間もない頃、欧米から帰国したばかりの新渡戸は塾に招かれて講演したほか、1904年、塾が社団法人になる時、新渡戸は社員の一人に名を連ねている。1907年、第5回卒業

式では、外遊中の梅子に代わって告辞を述べている。新渡戸の英語で書かれた「Bushido, The Soul of Japan (武士道)」は当時の秘書、アンナ・コープ・ハツホーンが、新渡戸の口からほとぼしる如くに出て来る英語を口述筆記したもので、彼女は梅子と新渡戸の共通の友人だった訳である。

アンナは、「女子英学塾」の創立直後の1900年から凡そ40年間、梅子が亡くなった後も無給で教鞭を取り、塾の発展に尽くした。1923年9月1日の関東大震災で塾が焼け落ちた時は、再建の資金集めの為にアメリカに行き、沢山の人から義援金を集め、津田塾の建て直しに尽力した。

梅子は、1929年(昭和4)8月16日夜、鎌倉の別荘で脳出血のため64歳で亡くなった。塾の講堂で校葬が行われた際、最初に立って弔辞を述べ、梅子を讃えたのは新渡戸だった。

〈Alma Mater〉

津田塾大学には、校歌も校章もないが、1905年女子英学塾の第3回卒業生が巣立つ卒業式で、『Alma Mater』と言う歌が初めて歌われた。メロディはスコットランド民謡からとったもので、アンナが作詞した。この『Alma Mater (ラテン語で母校の意)』が津田塾大学 College Song として今日まで歌い継がれている。こんな経緯から津田塾大学の事実上の校歌は、擬古英語による『Alma Mater』となっている。

Alma Mater :

O, Alma Mater, Mother dear With songs thy name we greet.

Who dost the Gate of Knowledge here Set open for our feet.

Thou turn'st our faces to the light. Thou pointest us the way.

The great of old, the wise and true Have trodden in their day.

〈養子息子の「津田眞」〉

梅子は結婚しなかったため、子どもはなかったが、弟・津田純の四男で当時、小学校1年生だった眞(まこと)を、1929年1月に養子に貰った。純家族は、梅子の家の斜め前に住んでいたため、養子になっても眞の暮らす家はそれまでと変わらず



最初の校舎で(麴町区一番町) —津田塾 hp—

だった。眞の楽しみは、おやつになると、兄弟と一緒に梅子の家に行き、おやつを貰うことだった。中でも一番印象に残っているのは、母になった梅子から、誕生日に高価な自転車を買って貰ったことだったという(私・和田は、1994年に眞氏に面会し、梅子について色々な話を聞かせて貰った。ここに書いたエピソードは、市販の伝記には載っていない貴重なものだ)。

眞が梅子の養子になって半年後に梅子は亡くなっているが、梅子の偉大さは両親からよく聞かされ、大きくなったら梅子のようになろうと決意し、旧制中学5年生だった1939年、アメリカ・イリノイ州のマンモスカレッジに留学し、日米開戦後もアメリカに滞在し、その後、日本陶器(現ノリタケ)のビジネスマンとして日米間で活躍した。

ところで私は、1959年(昭和34)4月、北沢中学校2年生になった時、英語がもっと出来れば日本を飛び出して、世界で活躍できるようになると考えて、千駄ヶ谷駅前にあった『津田スクール・オヴ・ビジネス』に通ったことがある。先生は津田塾大卒のおっかない女性で、“ノウ、ノウ、ワンスモア”が口癖だった。その時の英語テキストの最初のページに載っていた Spring has come. The buds are opening and green leaves are coming out. How pretty flowers are! How merry birds are! という現在完了形と感嘆文を丸暗記させられたので、今もこれが頭に残っているのである。英語塾は、今は津田塾大学の千駄ヶ谷キャンパスになってしまった。私は、1913年の卒業式で梅子が挨拶した時の英文の直筆原稿のコピーと、その甲高い肉声のCD(3分57秒)を持っている。(完)

2桁同士の掛け算を暗算で求める早業 (1) 河野公雄

皆さんは「インド式計算法」とか「インド人は2桁の掛け算を記憶している」とか、聞いたことがありますか。本当に、インド人は2桁の掛け算を全部記憶しているのでしょうか。



日東書院本社 2007 年出版

上の本によると、現在、インドの小学校では、 19×19 まで丸暗記するらしい。それ以上の計算は、いろいろなメソッドを活用して遊び感覚で自然に覚えていくとのこと。

今回、このテーマを取り上げることにしたのは、皆さんのお孫さんに、この暗算法を伝えて欲しいと思ったからです。お孫さんから、きっと「じいじ、すご〜い」と褒められるでしょう。そして、お孫さんの算数嫌いが治るかもしれません。

それでは、本題に入っていきます。まずは、2、3秒で答えが出る2つのパターンです。

■パターン1

$$?? \times 11$$

《??》は、11 から 99 までの任意の数

任意の2桁の数に11を掛ける計算です。

例として、 43×11 をやってみましょう。頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



$$4 \cdot 7 \cdot 3$$

(よん・なな・さん)

最初の4は43の十位の数4、2番目の7は十位の数4と一位の数3を足した数、3番目の3は43の一位の数3、これを並べた473が答えになります。

もう一つ、やってみましょう。 63×11 です。



$$6 \cdot 9 \cdot 3$$

(ろく・きゅう・さん)

はい、答えは693です。

もっと大きい数でやってみましょう。 87×11 です。



$$8 \cdot 15$$

(はち・じゅうご)

$$9 \cdot 5 \cdot 7$$

(きゅう・ごお・なな)

この例では、2番目の数が $8+7=15$ で10以上になっています。この場合は繰り上がりの処理が必要です。15の5を残し、10を上位の8に移します。このとき8に1を加えます。すなわち、 $8 \cdot 15$ を $9 \cdot 5$ と直し、最後に7を付け加えて957とします。

同様の例題をもう一つ。 94×11 です。



$$9 \cdot 13$$

(きゅう・じゅうさん)

$$10 \cdot 3 \cdot 4$$

(じゅう・さん・よん)

はい、答えは 1034 です。

ある数に 11 を掛ける計算では、11 を、10 と 1 に分けて、10 倍した数と 1 倍の数を足す方法もあります。上の 94×11 は $940 + 94 = 1034$ というふうに求めることができます。しかし、3 桁の数と 2 桁の数の足し算で繰り返りがあると、計算間違いを起こしやすと思います。

■パターン 2

$$?? \times 99$$

《??》は、11 から 99 までの任意の数

任意の 2 桁の数に 99 を掛ける計算です。

例として、 27×99 をやってみましょう。頭の中では、以下のように数字を思い浮かべています。



$26 \cdot 7 \cdot 3$
(にじゅうろく・なな・さん)

最初の 26 は 27 から 1 を引いた数、2 番目の 7 は 9 から 26 の十位の数 2 を引いたもの、3 番目の 3 は 9 から 26 の一位の数 6 を引いたもの、これを並べた 2673 が答えになります。

もう一つ、やってみましょう。 58×99 です。



$57 \cdot 4 \cdot 2$
(ごじゅうなな・よん・にい)

はい、答えは 5742 です。

更にもう一つ。 85×99 です。



$84 \cdot 1 \cdot 5$
(はちじゅうよん・いち・ごお)

はい、答えは 8415 です。

11×99 の計算は、パターン 1 でもパターン 2 でもあります。2 つの方法でやると以下のようになります。上がパターン 2 の暗算法、下がパターン 1 の暗算法。パターン 2 の方が速くできそうですが、どちらも 2,3 秒で暗算できます。



$10 \cdot 8 \cdot 9$
(じゅう・はち・きゅう)

$9 \cdot 18$
(きゅう・じゅうはち)
 $10 \cdot 8 \cdot 9$
(じゅう・はち・きゅう)

ある数に 99 を掛ける計算では、99 を、 $100 - 1$ と考え、100 倍した数から 1 倍の数を引く方法もあります。上の 85×99 は $8500 - 85 = 8415$ というふうに求めることができます。しかし、100 から 2 桁の数を引かねばなりません。それよりは、9 から 1 桁の数を引く方が、2 回やるにしても、簡単でしょう。

■数の話

「わんりい」に度々寄稿されている博識の和田宏さんから教えてもらった話です。

ロシアのウクライナ侵攻から 1 年目の 2023 年 2 月 24 日の朝日新聞の素粒子欄に以下の話が載っていました。

第 1 次世界大戦の開戦日は 1914 年 7 月 28 日。 $19 + 14 + 7 + 28 = 68$ 。第 2 次世界大戦は 1939 年 9 月 1 日、ドイツ軍のポーランド侵攻で始まった。 $19 + 39 + 9 + 1 = 68$ 。そして、ウクライナ侵攻は 2022 年 2 月 24 日。 $20 + 22 + 2 + 24 = 68$ 。奇妙な数字の一致、終わりの見えぬ戦況への不安は募ります。

そして、ウクライナ侵攻から 2 年経過しましたが、戦いが終わる気配はありません。1 日でも早く終結して平穏な日々が迎えられるよう祈るばかりです。

(つづく)

みんなの広場

●料理講習会が楽しく、終了しました

ゴールデンウィーク最中の5月2日に、“わんりい”主催の「餃子の作り方講習会」を開催し、「中国語講座」の郁唯先生に「中国風三鮮餃子」を教えて頂きました（「三鮮」とは「豚肉」「海老」「ニラ」を指すそうです）。好天に恵まれた爽やかな日で、参加の皆さん、会場の麻生市民館に、10時半には既にお揃いでした。

手作りの皮は美味しいと分かっているにもかかわらず、今回は、皮から手作りする水餃子でした。最初に郁先生からの説明を聴き、デモンストレーションを拝見してから、3つのテーブルに分かれて作業開始です。

先ず、皮の材料を準備しなければなりません。薄力粉に、粉の半量の水を数回に分けて加えながら、かき混ぜ、捏ね、表面を滑らかにして、ラップを被せて、1時間ほど寝かせました。その間に、中身の餡作りです。材料は三鮮の他に、細かい炒り玉子、茹でてプロセッサーに掛けたキャベツ、刻んだ葱と生姜で、これらを醤油、酒、ゴマ油等の調味料と合わせて、粘りが出易いよう

に、箸で同一方向にかき混ぜます。ここまでは皆さん順調に進めていらっしゃいましたが、難関は皮作りです。郁先生が手際よく麺棒を操り、直径8cm程の丸い皮を次々と作っていかれる様子を見て、見よう見まねで作るものの、大きさはマチマチ、形は歪み、思うようにはいきません。しかし、その内にその人なりの皮が出来てきました。教えて頂いた簡単な包み方で餡を包み、二度、差し水をして茹で上げ、美味しい水餃子が出来上がりました。

中国では茹で汁と一緒に戴くというので、茹で汁をスープ代わりにしてみようと試みたのですが、使用したお鍋が大き過ぎたのか、茹で汁は只の茹で汁で、何の味もせず、これは失敗でした（予行の時は良いお味の茹で汁が出来たのですが）。それでも、青菜の和え物、デザートは杏仁豆腐、餃子のお土産も含めて、参加された皆さんに喜んで頂けたのではないかと考えています。手順の進め方等、事務局としては今後への反省点もありました。

（わんりい事務局）



郁先生の説明に耳を傾ける皆さん



これから皮作りに入ります



テーブル別に作業スタート



二度、差し水をして茹で上げる



やはり手作りは美味しいとニッコリ



次回は何を作りましょうか？

☯ チャンドラギリ・ヒルの思い出 ☯

吉光 清

早朝のエベレスト遊覧飛行の興奮と満足感が静まらないまま、ホテルに戻り、朝食のバイキング。チェックアウトしようと荷物と共に部屋から廊下に出て、ドアが閉まったところで、カードキーを室内に差し込んだままだったことに気付いた。フロントに降りるためのエレベーターは使用することが出来てホッとしました。というのは、前日、チェックインして高層階までエレベーターで昇る時には、カードキーをタッチしないと動かないシステムだったからだ。

フロントでは、ガイドさんを通じて状況を説明して、そのままチェックアウトすることが出来た。バスに乗りこみカトマンズ郊外の古都パタンに向かった。パタンでは、「ダルバール広場」「ゴールデン・テンプル」「クンベシュワール寺院」「マホポーダ寺院」などの観光ポイントを忙しく駆け巡ったが、狭い裏町の通り抜けも興味深かった。

マホポーダ寺院前のレストラン3階のテラスのような席で、中華(?)ランチと白ワインで昼食にした。寺院の屋根を猿たちが走り回り、鳩も屋根の上に沢山集まっている。日本では到底、お目に掛かれない光景だった。

パタン観光のもう一つの目玉は、ロープウェイを利用してチャンドラギリ・ヒルに昇り、頂上にあるレストランや展望台から、時間帯により「日の出」「ヒマラヤ連峰のパノラマ」「沈む夕陽」を眺めることである。勿論、「日の出」は宿泊しなければ見ることは難しいし、ヒマラヤ連峰の眺望は限られた季節の、気候条件に恵まれた日の、短い時間帯にしか観ることが叶わないものである。

ロープウェイは4人乗りで、頂上と麓を直結していた。展望台から沈みかけた夕陽を見た。雲の中に沈む夕陽は距離感が失われ、通常より大きく見えた。

麓に向かう立派な舗装道路を歩いて下ると、途中でタルチョーと、ネパールを統一した国王軍の金色のレリーフがあった。

ヒンドゥー寺院があったので、履物を脱いでお参りしたら、それが良かったのか、中から人が



木の実製の首飾り

現れ、額に赤色の印(ティールカ)を付けられ、木の実製の首飾りを掛けられた。

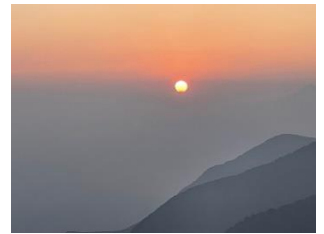
更に下ると宿泊予定のホテルがあった。気温が下がり、吐く息は白くなって

いた。フロントは平屋の建物で、宿泊棟やレストランはそれぞれ別棟になっていた。部屋は平屋だったが、窓から頂上の展望台が望めた。午後6時半にレストランに行き夕食を摂った。スパイシーな料理がたくさん並んでいた。外に出るとパタン市街の夜景が奇麗だった。ヘリポートと温水プールもあった。

翌早朝、頼んであったモーニングコール前に起き出し、双眼鏡を持ち、防寒を万全にして、プール横を通って、誰も居ない見晴らしポイントに着いた。手摺りには白く霜が降りていた。朝の太陽が雲の上に現れると、徐々に周囲が明るくなって来て、ヒマラヤ連峰への期待が高まった。ベストコンディションとは言えなかったが、ヒマラヤ連峰が部分的に見えた。傍にやって来たガイドさんの説明では、左の端に見えたのは「マナスル」、その右にずっと離れて「ガネーシャ」、更に右に離れて「ランタン」ということであった。エベレストは雲の向こうだった。

チェックアウト途中の8時に突然、停電になった。誰も慌てず、何のアナウンスも無く予定通りらしかった。下りのロープウェイは自家発電のせいか、妙にゆっくり下降した。

(2024.1.23~24)



雲の上に顔を出した朝の太陽

◇満柏画伯の漢訳俳句◇

閑さや

岩にしみ入る

蝉の声

松尾芭蕉

xián shān tīng chán míng

閑山听蝉鸣

shēng shēng qìn shí yán

声声沁石岩

【わんりいの催し】

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時 6月18日(火) 10:00~11:30
7月9日(火) 10:00~11:30
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

### \*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：6月30日(日) 10:00~11:30  
7月は休講
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



#### ■ 6月・7月定例会 代表宅

- ▼6月13日(木) 13:45~
- ▼7月18日(木) 13:45~

#### ■ 'わんい' 発送 代表宅

- ▼7月号 7月1日(月) 10:30~
- ▼8月 休 刊

## ☆☆ 編集後記 ☆☆

6月は梅雨の季節です。沖縄は既に梅雨に入ったようですね。これから梅雨前線が、九州・四国と徐々に北上して来るのでしょうか。

最近の天気予報で、予報士さんが、「間もなく梅雨に入ります。梅雨には豪雨と、天候の急変に気を付けてください」と言っているのに驚きました。昔、40年ほど前までは、梅雨は静かに降りました。空は明るいのに毎日しとしとと、粉糠雨が降り続き、庭木の葉にはカタツムリが動き回り、葉陰ではアマガエルが雲の様子を観察するように空を見上げているのが見られたものでした。しかし最近、北の寒気と南の暖気が強いままぶつかり、梅雨前線上で、激しい風雨をもたらします。梅雨は豪雨による水害・土砂崩れが多発する季節に変わりました。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800円、入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
10月以降の入会は、当年度会費 1000円
■問合せ：044-986-4195 (寺西)

‘わんりい’ 294号の主な目次

寺子屋 四字成語(73)『鶏犬昇天』……………	2
「日译诗词」(41) 杜牧『江南の春』……………	3
「漢詩の会報告」(72) 白居易『閑行』……	4
「中原雑感」(42)	
「少浪底」の国際的ブランド化……………	6
「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(13)……………	8
青蛙花……………	10
女子教育のパイオニア・津田梅子(完)……	12
2桁同士の掛け算を暗算で求める早業(1)……	14
みんなの広場……………	16
‘わんりい’の催し・お知らせ……………	18